「手塚治虫さんの世界」幕開け

技術妄信→人類滅亡忘れないで

アトムと人 どう共存？

激動の百年が終わり、漫画家、故・手塚治虫さんが描いた二十一世紀の幕が開けた。鉄腕アトム、火の鳥…。手塚さんの未来像は、作品を重ねる中で、夢の世界から科学技術の暴走、そして人類滅亡へと変わる。が、根底には科学技術妄信への警告があった。新たな百年。その間に、世界はどんな変ぼうを遂げるだろうか。われわれは手塚さんの心配を払しょくできるだろうか。

妻悦子さん・「見せてあげたかった」

「手塚があれほど思っていた二十一世紀。ちょっとだけでも見せてあげたかった」。手塚さんの妻、悦子さん(六八)は話した。「今の科学の発展をみていると、いつかアトムのようなロボットがでてきそうですね」

《昭和二十七年に連載がスタートした鉄腕アトムの舞台は二〇〇三年。未来都市には、空中を走る車やテレビ電話など科学技術があふれる。二十一世紀にロボットは感情や意思を持つ、と描く》

認知脳科学の旗手で、東京大大学院総合文化研究科助教授の酒井邦嘉さん(三六)は大みそかも研究室にこもり、「鉄腕アトムのように人の心を持つかのようにふるまうロボットの出現は遠い未来のことではない」と話した。

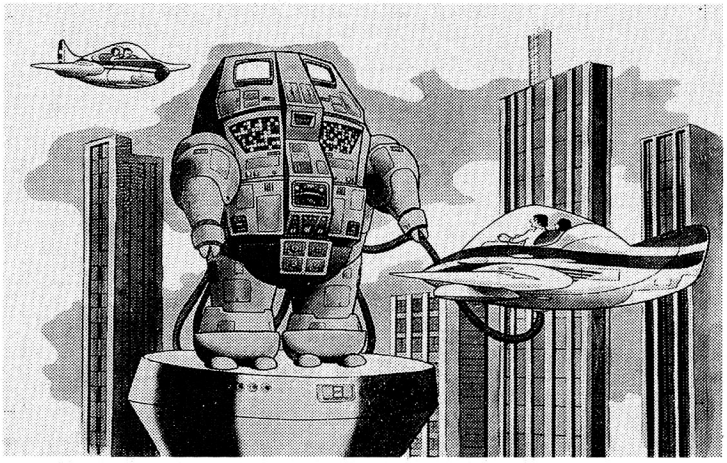
人の心について酒井さんは、「記憶」「知覚」「意識」といった脳の働きと定義する。「意識」を持つように見えるロボットが完成したために、ロボットと人間がどう共存していくかで悩む時代も夢物語ではないという。

現在、日本は約四十万台の産業用ロボットを所有し、労働現場ですでにロボットと人の共存が始まっている。人間型コミュニケーションロボット「ロボビー」を開発した国際電気通信基礎技術研究所（ATR）の知能映像通信研究所社長、中津良平さん(五四)は「鉄腕アトムは二十世紀の究極の夢」とし、「今度はわれわれが手塚さんにかわるビジョンを持たなくてはいけない」と話す。

《手塚さんは、ライフワーク「火の鳥」の「未来編」（昭和四十二年）で、西暦三四〇四年の世界を描いた。度重なる核戦争で地下に暮らす人類を描き、科学技術の発展による人類滅亡というシチュエーションを示した》

「手塚治虫・覚書」などの著書がある岐阜経済大の榊原英城・助教授は「アトムの世界が実現すれば、人間の生活は豊かになるはずだった。しかし、実際は便利さとひきかえに心の豊かさを失った」と話す。

それでも、手塚さんの妻、悦子さんは希望を捨てていない。亡き夫の心配をぬぐうかぎは子供たちだと思っている。「将来を担う世代が夢を持って成長できる世紀になってほしい」。そう願いながら新世紀を迎えた。



▲故・手塚治虫さんが描いた未来都市（©手塚プロダクション）。妻、悦子さんは「21世紀をちょっとだけでも見せてあげたかった」という